

記 事

例会記録

第47回 日本医史学会神奈川地方会 秋季学術例会・日本医史学会9月例会 合同例会

平成28年9月10(土)

鶴見大学・大学会館3階第2会議室

宿題報告

自家感染実験の歴史

日本医史学会神奈川地方会前会長

滝上 正 先生

特別講演

絵で見る顎関節脱臼整復法の歴史

東京慈恵会医科大学客員教授・

鶴見大学客員教授特任教員 杉崎正志 先生

一般演題

「医」の思想と医療倫理教育

東京大学大学院医学系研究科医療倫理学分野

勝井恵子 先生

日本医史学会10月例会

平成28年10月22日(土)

順天堂大学センチュリータワー4階406

1. 医事史料としての『吾園叢書』—明治女医・中央衛生会・伝染病予防他一— 三崎裕子
2. 漢字圏全古医籍の計量史研究 真柳 誠

例会抄録

運命の女神は気まぐれ：所郁太郎の事

加藤 茂孝

所郁太郎の名をご存知ですか？ 夭折しなければ歴史に名を残した人です。

1. 生い立ち

天保9(1838)年2月16日生 美濃国不破郡赤坂宿羽根町(大垣市赤坂町西町)酒造家矢橋捨右エ門亦一の4男。嘉永元(1848)年医師・所伊織の養子。美濃国大野郡西方村(岐阜県揖斐郡大野町西方)。

2. 医学修業

青木松軒(養軒)(加納藩医), 安政2(1855)年安藤桂州(京都), 安政5(1858)年8月2日(20歳, 以下, 満年齢)洋学館(越前大野藩)で伊藤

慎蔵, 万延元(1860)年8月15日(22歳)適塾(大坂)で緒方洪庵に師事。適塾姓名録では550番目/636人。

3. 上医を志す

「医は人の病を医し, 大医は国の病を治す」という語を残しているが, これは陳延之(六朝時代)の「上医医国, 中医医民, 下医医病」の上医を意味し, 国家の役に立ちたいという意欲が強かった。吉田松陰の二十一回猛士, 高杉晋作の東洋一狂士の語を知っていたと思われ, 日本狂士と号した。

4. 長州藩士に

文久2(1862)年6月に京都河原町で開業, そ

の医院前に長州藩邸があり、交流が始まった。長州藩の御典医長野昌英から推薦を受け、桂小五郎と麻田公輔（周布政之助）の推挙で長州藩士（お雇い格）になり、長州藩医院総督。これは、医院の語の日本での初例であるという。

その後、勤王派藩士として活動し、文久3（1863）年8月18日の政変で七卿に従い長州へ下る。同年10月8日藩主毛利敬親にお目見えして、28石の藩士に、身分は、寺社組支配、遊撃隊参謀、医院総長。高杉晋作（慶応3（1867）年、結核死）と親友になる。

5. 井上馨を救う

所郁太郎が一瞬歴史の表に登場するのがこの事件である。元治元（1864）年9月25日山口政事堂で幕府の征長軍に対抗する藩方針の激論（俗論派VS正義派）後、井上馨が袖解（そでつき）橋で闘討にあう。6か所を切られ、農家の畚（もっこ）で井上家に運ばれたが、御典医2名は手の施しようがないと言い、兄は介錯すると言う。母親が止めに入って、そこへ駆けつけた郁太郎が外科手術を行った。焼酎で消毒、無麻酔、畳針で50数針縫合。施術4時間。井上は回復し、元治2（1865）年1月10日には高杉晋作の挙兵に応じて鴻城軍総督になる。

6. 郁太郎の感染症死

郁太郎は遊撃隊参謀として行動中、元治2（1865）年3月12日死去。主治医の小田精亮がヂェキ（時疫、腸チフス？）と診断した。井上、所の運命の逆転に運命の女神の気まぐれを感じる。郁太郎の墓は、遊撃軍本営のあった円正寺の裏山にある（山口市吉敷上東三舞くよしきかみひがしさんまい）。

7. 遺族の不運

郁太郎には伊織の娘たつとの間に、一子す免がいた。元治元（1864）年4月7日伊織の死、郁太郎の死、大垣藩の詮議の厳しさなどにより所家は廃絶。妻たつは再婚、娘す免は1882年7月10日（以下、太陽暦）稲川源平を養子入籍し、群馬県

碓氷郡秋間村（安中市）に移住し、養蚕に従事、1897年まで居住。

8. 井上家、品川家からの郁太郎事績の探索

1891年4月8日、美濃出身の勤王詩人梁川星巖（安政5（1858）年コレラ死亡）贈位奉告祭に、品川弥二郎が岐阜に来た折、所郁太郎の事績を尋ねた。県会議員金森吉次郎は、新聞広告を手配（1891年7月1日、2日、3日岐阜日日新聞および新愛知）。

1891年10月28日、濃尾地震直後に金森吉次郎が上京し、品川弥二郎に震災の状況と所郁太郎の事績判明を報告、また、井上馨にも報告。

9. 所家再興

1897年7月14日継嗣再興（甥の實吉3歳を東京井上邸で養育、医師に）。1898年7月4日従四位追贈。實吉にも後継男子がなかったため、井上育英会から安夫（医師）が所家に入り、現在まで家系継続。

10. 血統者の名乗り出

1929年4月26日郁太郎の靖国神社合祀の記事が新愛知（現、中日新聞）に出て、す免の子、孫娘所すゑ（岐阜市加納町）が名乗り出る。所家の継嗣再興を知らず。ここにも、運命の女神の気まぐれを感じる。すゑには、子が無く、所姓の血統者はいない。す免は高橋庄次郎と再婚し、その娘（郁太郎の孫娘）うさのは、久米兼吉と結婚し、そこには久米姓関連の血統者が現存している。

11. 顕彰碑など

1938年11月22日井上三郎（馨の孫）寄進。（岐阜県大野町大字西方425-1：所家屋敷跡）。1988年10月8日、生地である赤坂の本陣公園に郁太郎の銅像が、その脇に1995年3月12日、説明碑が建つ。

12. 適塾名簿にみる夭折の割合

適塾生636名中、判明しているだけでも夭折と思われる死亡例が、37名（5.8%）である。郁太

郎もこの中に含まれる。

13. 感染症の死因

日本で、感染症が主要死因でなくなるのは、1950年頃からであり、それ以前の日本人はほとんどが感染症で亡くなっていた。感染症からほぼ自由になれたのは、この60数年間の事に過ぎない。

参考文献

- 1) 青山松任「所郁太郎伝」縦観荘出版部 1933. (復刻) 新人物往来社 1991
- 2) 「世外井上公伝」内外書籍 1933
- 3) 「母の力」国民学校初等科国語読本 1941-54
- 4) 司馬遼太郎「美濃浪人」『人斬り以蔵』所載, 新潮文庫 1969
- 5) 司馬遼太郎「無名の人」中学国語 2, 学校図書 1988
- 6) 加藤彰子「所郁太郎と残された妻子の生涯」郷土研究岐阜 109号, 2008

(平成 28 年 6 月例会)